

社会臨床ニュース

第 63 号

2007 年 4 月 15 日

発行◆日本社会臨床学会 〒310-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1 茨城大学教育学部情報文化教室林研究室
E-Mail: shakai.rinsho@gmail.com Web: <http://www1.atpages.jp/sharin/>
FAX: 029-228-8314 TEL: 029-228-8314
郵便振替: 00170-9-707357 銀行: みずほ銀行東陽町支店(普通) 8013029

日本社会臨床学会第 15 回総会のご案内 東京・和光大学 2007 年 5 月 26 日(土)・27 日(日) ごあいさつ

日本社会臨床学会運営委員長 三輪 寿二
第 15 回総会実行委員長 篠原 睦治

わたしたちは、いま、和光大学を会場にした、日本社会臨床学会第 6 回総会(1998 年 5 月)を想い起こしています。当時の総会実行委員長は、小沢牧子さんでしたが、総会プログラムでは、「さつき風、岡上に雲、動く—これまでの社臨・これからの社臨」と呼びかけました。「岡上(おかがみ)」は、和光大学が建つ地域の古くからの地名ですが、和光大学は、その一角の丘の上にあります。このたびの総会のときにも、「さつき風」が吹き、「雲が動いて」さわやかな会場になればと祈っています。

わたしたちの学会は、教育、医療、福祉などに関わる「臨床」の諸現実、諸問題を、社会、文化、歴史のなかで、差別や人権、優生や共生などの問題意識と重ね合わせながら、当該の分野・領域に関わる者、関わらない者、だれもが一緒に考え続けてきました。

このたびの総会では、臓器移植法「改正」や尊厳死法の立法化やの動き、「改正」教育基本法の成立などの今日の状況をにらみながら、「生命操作の現在」と「教育とグローバリズム」に焦点をあてて、ゆっくり、じっくり、発題と討論を重ねます。

会員、非会員を問わず、ご興味、ご関心に合わせて、友人、知人をお誘いあわせ下さりながら、気楽にご参加くださいますように、ご案内します。

当日は、小沢さんや篠原のゼミなどで出会った者たちが、総会実行委員会メンバーとして、会場運営に当たります。ご参加の皆さまに気持ちよく過ごしていただくために、お役に立てれば幸いです。何なりとお申し出下さい。

前回のときもそうでしたが、今回も和光大からは、物心両面にわたって多大なご協力を頂いています。ここに記して、感謝の気持ちを表わします。

重ねて、和光大学内外、東京内外、そして日本の各地から、ご参加くださることを心から願って、いざないのメッセージといたします。

なお、本紙は、次のようになっております。

総会プログラム(2～3 ページ)、総会会場へのご案内(4 ページ)、シンポジウム・記念講演のご案内(5～11 ページ)、日本社会臨床学会って何だろうか(12～13 ページ)など。

日本社会臨床学会第 15 回総会

日 時 2007 年 5 月 26 日 (土)・27 日 (日)
場 所 和光大学 J ホール (J401 号室) (東京都町田市金井町 2160)
参加費 2,000 円 (全期間通し) (交流会参加費 3,000 円)

〈プログラム〉

第一日 (5 月 26 日)

11:00 ~ 12:00

定期総会 (第Ⅶ期学会運営委員会事業・会計報告、第Ⅷ期学会運営委員会委員選出ほか)

13:00 ~ 17:00

シンポジウムⅠ 生命操作の現在を検証する

発題 1 臓器移植法「改正」・尊厳死法の現在と問題

古賀典夫 (脳死・臓器移植に反対する市民会議)

発題 2 少子高齢化社会と介護保険・尊厳死

高石伸人 (九州龍谷短期大学)

発題 3 脳死・臓器移植から再生医療への現在と問題

堂前雅史 (和光大学)

司会 三輪寿二 (茨城大学)・篠原睦治 (和光大学)

18:00 ~ 20:00

交流会

第二日 (5 月 27 日)

10:00 ~ 12:00

記念講演 グローバリズムと心性操作

佐々木賢 (神奈川県高等学校教育会館教育研究所代表)

13:00 ~ 17:00

シンポジウムⅡ 教育とグローバリズム

発題 1 グローバリズムと愛国心教育はなぜ親密か

小沢牧子 (社会臨床学会運営委員)

発題 2 自己実現の教育とグローバル化・心理主義化

中島浩壽 (法政大学・河合塾コスモ)

発題 3 グローバリズムマシーンとしての学校教育

岡崎勝 (名古屋市立小学校)

司会 原田牧雄 (神奈川県立横須賀高校定時制)・林延哉 (茨城大学)

- 上記プログラムの発題要旨などについては、5～12 頁をお読みください。
- ノートテイク（場合によってはパソコン通訳）を希望される場合、会場受付でお申し出ください。
- 第一日の昼食は、大学生協をご利用できます。第二日に関しては、生協弁当（600 円）を販売いたします。
- 和光大学学生・大学院生の総会参加費は 1,000 円です。会場受付でお申し出下さい。

〈お問い合わせ・連絡先〉

第 15 回総会実行委員会事務局

東京都町田市金井町 2160 和光大学現代人間学部篠原研究室（本年 4 月より学部名、改称）

Tel：044-989-7777（内線 5901） 携帯 Tel：090-2735-6280

Mail：mutu-shino@gem.hi-ho.ne.jp

日本社会臨床学会事務局

茨城県水戸市文京 2-1-1 茨城大学教育学部林研究室

Mail：shakai.rinsho@gmail.com Fax：029-228-8314 Tel：029-228-8314

Web：http://www1.atpages.jp/sharin/

〈宿泊のご案内〉

以下の二つのホテルについては、予約の際に「和光大学の社会臨床学会総会参加のため」と伝えて頂ければ、一泊シングル 6,000 円、ツイン 10,000 円（サービス料、消費税込み）で宿泊できるようになっています。いずれのホテルも、今総会用サービス料金となっています。

ホテル町田ヴィラ

東京都町田市森野 1-20-7 小田急線町田駅北口下車

Tel：0427-24-0840 Fax：0427-24-6800

ホテルラポール千寿閣

神奈川県相模原市上鶴間本町 3-11-8 小田急線町田駅南口下車

Tel：042-749-1121 Fax：042-749-8501

いずれも、町田駅から徒歩 5 分前後です。

町田駅は、鶴川駅から小田原・藤沢駅に向って、二駅目（6 分）。

詳細は、各ホテルにお問い合わせ下さるか、各ホテルのホームページをご覧ください。

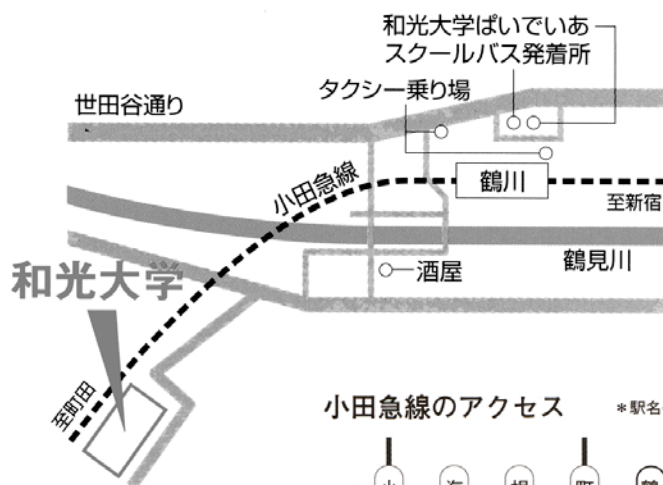
〈総会会場へのご案内〉

会場へは、小田急線鶴川駅で降りていただきますが、鶴川駅までは、下記小田急線のアクセスをご参照ください。鶴川駅からは、次のいずれかでお越しください。

- ・スクールバス(時刻表および地図参照)
- ・徒歩(15～20分程度)。必ず、下りホーム出口(南口)をご利用下さい。
- ・タクシー(1,000円前後)

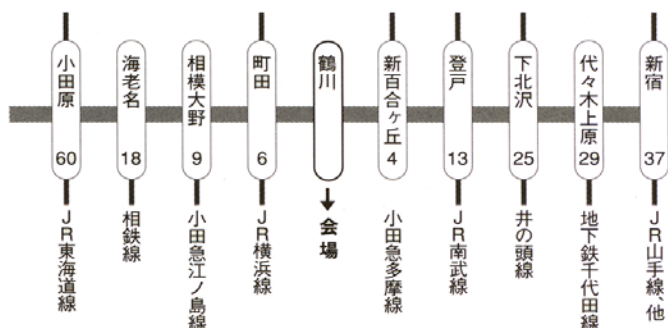
また、車でお越しの場合は、駐車場確保の都合上、あらかじめ、実行委員会宛ご一報下さい。

鶴川駅から会場への地図



小田急線のアクセス

* 駅名の下に数字は鶴川駅までの平均所要時間(分)。



鶴川駅前—和光大学間のバス時刻表

	5月26日(土)		5月27日(日)	
	鶴川駅前発	和光大学発	鶴川駅前発	和光大学発
09:00		:50	:00 :20 :40	:10 :30 :50
10:00	:00 :20 :55	:10 :45	:10	
11:00		:50		:50
12:00	:00 :30	:20	:00 :20 :40	:10 :30 :50
13:00	:15	:05	:10	
14:00	:20 :55	:10 :45		
15:00		:55		
16:00	:05 :35	:25	:30 :50	:20 :40
17:00	:20 :50	:10 :40	:10 :30 :50	:00 :20 :40
18:00	:20	:10	:10	:00

●「学会総会に参加」と言えば、無料です。

●道路の事情で、予定通りに運行されないことがあります。

●お問い合わせは、総会実行委員会携帯
Tel:090-2735-6280 にどうぞ。

〈シンポジウムI〉 生命操作の現在を検証する

はじめに

現在、日本において、1997年に成立した臓器移植法では、「本人意思の尊重」原則が大きなブロックになって脳死・臓器移植が一向に普及していない。特に、小児臓器移植を禁じている法の限界に直面して、改善策が迫られている。これが臓器移植法の「見直し・改正」を主張する側の言い分だが、このような見方でよいのかについては、さらに検証を重ねていく必要がある。ここには、死なしてよい生命と生かさなくてはならない生命の格差問題があるし、「死の自己決定権」でよいのかという問いかけ等々がある。

さらに、特に21世紀に入ってから、かしましく論じられるようになったことに、「延命医療の中止」問題と尊厳死の倫理化・合法化問題がある。この背景には、医療費抑制という国家的・社会的要請や「少子高齢化社会＝危機的な社会」というキャンペーンやがある。これらの社会的要請や自己決定権的思考のなかで広く表現されてきた、普段に暮らす人々の「尊厳死」願望も、ひるがえって、これらの動きを下支えしているように思える。

臓器移植にしても尊厳死にしても、これらを推進する社会的要請と論理は、一見、太くなりつつあるようだが、それに抗して、いまなお、問題提起的、歯止めの発言は繰り返されているし、社会臨床学会も、その一端を担ってきた。

一方、移植医療を超えて再生医療へという流れは、移植医療を推進する側からも、そして、移植医療には慎重な立場を取る側からも、歓迎されている。昨今のマスコミは、再生医療に関わる研究と発見を、実用化の可能性や現状とともに、明るいニュースとして報じ続けている。再生医療には移植医療と同様な問題はないのか、再生医療特有の課題や問題は何なのか、この際、じっくり考えたいと願っている。

司会者たちは、以上のような認識と問題意識を持っているが、これから紹介する三人のシンポジスト、古賀典夫さん、高石伸人さん、堂前雅史さんからは、「生命操作の現在を検証する」ために、それぞれの切り口で、鋭くもリアルな問いを提出していただけるものと期待している。

(シンポジウムI司会 篠原睦治、三輪寿二)

発題1 臓器移植法「改正」・尊厳死法の現在と問題

古賀 典夫

一昨年、国会に議員立法で「脳死」を一般的な人の死とする「臓器移植法」改悪案が上程された。その後も継続審議の手続きが取られ、現在に至っている。その国会の「脳死」を巡る議論の中では、「意識の喪失が人の死である」という趣旨の発言が行われるようになっている。健康保険の診療報酬には、「脳死」とされる人からの臓器移植が組み込まれ、遺伝子診断も組み込まれた。

昨年5月26日には、関係閣僚も出席する「社会保障の在り方に関する懇談会」が医療費抑制の観点から「尊厳死・安楽死」の推進を明確に打ち出した。そして、国会議員の中では、「尊厳死法案」

が検討されている。医療現場での人工呼吸器の取り外し問題などを契機にしながら、「尊厳死」推進のキャンペーンも行われている。

これらと同時並行で進められてきた政府・与党の政策が『介護保険法』の改悪、「障害者自立支援法」制定、医療制度改悪だった。金を持たない者はますます福祉や医療が受けられない状況が強められると共に、「働けない者」「人の手を借りずに生活できない者」をますます切り捨てていこうとする方向が強められてきた。他方、こうした政策への反撃も展開されている。

こうした優生政策や能力主義による選別は、国を縛る憲法から民衆を縛り戦争へ動員する憲法へと変える動きとも一体であると思う。

こうした動きを具体的におさえながら、どうやってこれらに立ち向かっていくのかを考え提起してみたいと思う。

こが・のりお 脳死・臓器移植に反対する市民会議世話人、「怒っているぞ、障害者切捨て全国ネットワーク」メンバー。論文に「最近の「尊厳死・安楽死」推進の動きとその批判」社会臨床雑誌 12 巻 3 号(2005 年)、「なぜ、障害者自立支援法に反対するか」同誌 13 巻 3 号(2006 年)など。

発題 2 少子高齢化社会と介護保険・尊厳死

高石 伸人

大学の教員をしながら、筑豊の自宅で「障害」をもつ人を含む友人たちと一緒に、自認可の「虫の家」というフリースペースを運営していて、今年 21 年目を迎えました。17 年前にはダウン症の息子を授かりました。教員になってから、半分はノルマを果たす必要からいくつかの論文を書きました。テーマは、ハンセン病、臓器移植、社協論、仏教と福祉について等です。今は、いじめ・自殺や子ども虐待のことを調べていて、水俣病事件についても少し考えてみたいと思っています。

さて、今回の総会で問題提起を仰せつかり、「少子高齢化社会と介護保険・尊厳死」という課題で手打ちしたのですが、今はまだ上の空で思考回路の整理ができていません。ただ、子ども問題を調べる中でも考えさせられたのですが、少子高齢化社会というのは、子どもたちがたくさんの人たちに囲まれて、眼差しを注がれている社会なの다는ことです。その点で、子どもたちは息苦しいだろうと直感します。しかも、「少子高齢化社会＝少子 vs 多数の高齢者」という負担の構図を意図的にばら撒いて相互牽制を煽り、所得の再分配という原則から国民の目を逸らせようとしている、そんなふうにも思われます。何せ、数の少ない子どもたちに、迷惑で負担のかかる「介護」の必要なたくさん的高齢者を養ってもらわないといけないわけですから、稀少な人的資源として「健やか」に育てていただかねばなりません。もちろん、高齢者たちにも「応益」の負担と、「要介護認定」予備軍には予防のための筋トレを課して、陰に陽に自立に向けた努力を強いながら、しかし、やがて訪れる「見苦しい老い」に、徐々に向き合ってもらいます。そのうえで、家族や社会や国家に迷惑をかけるくらいなら、いっそ「美しく死にたい」という自己決定の花道を用意しようとしている。まあ、漠然とそんな勘繰りに頭をめぐらせているところです。

たかいし・のぶと 九州龍谷短期大学勤務。論文に「証言：『らい予防法』を生きて」九州龍

谷短期大学紀要第45号(1999年)、「閉塞する死—『商品化社会』の精神に関する一考察」九州龍谷短期大学紀要第46号(2000年)など。なお、第6回総会(和光大学)の分科会「老いと介護をめぐって」(社会臨床雑誌6巻3号)でも、同様なテーマで論じている。

発題3 脳死・臓器移植から再生医療への現在と問題

堂前 雅史

幹細胞や前駆細胞を用いた再生医療は、適合性や臓器不足などの問題を抱えている臓器移植に代わりうるものとして注目を浴びつつある。中でも万能細胞といわれる胚性幹細胞は、クローン技術と結びつけることによって免疫拒絶反応を生じない再生医療への道を開くと期待されていたが、捏造問題のようなスキャンダルを生み出し、これらの分野における研究者間・企業間の熾烈な競争の表れとして見る事ができよう。こうした技術についてはしばしばクローン技術やES細胞を用いる研究が注目されるが、他にも様々な展開が見られ実用化されつつある。今回は、再生医療の研究の現状について私が知り考えたことを申し上げ、先端生命科学・医療研究をめぐる社会問題についての議論の材料としていただければ幸いである。

私のもともとの専門は動物のホルモンと行動の関係を探ることだったが、遺伝子と行動の関係を考えたのがきっかけで、GMO、BSE、クローン技術など科学と社会の関係について考えるようになった。現在は都市部における自然保護の問題を考えている。

どうまゑ・まさし 和光大学現代人間学部身体環境共生学科勤務。今回のテーマに関連する論文として、「市場は『種の壁』を開く—『狂牛病』、クローン豚、そして生物進化」『アソシエ』No.9(2002年)、「生命科学技术と私たちの社会—クローン技術を例に」『和光大学人間関係学部紀要』No.6(2002年)、「遺伝子組み換え作物の生態系への影響をめぐる論争」『アソシエ』No.7(2001年)、「クローン人間と『“ヒトラー”の遺伝子』」『現代思想』Vol.26-11(1998年、廣野喜幸と共著)、「『同性愛の遺伝子』をめぐって」『情況』1996年11月号など。

〈記念講演〉グローバリズムと心性操作

佐々木 賢

心性とは態度や習性や感情の動き方の癖をいう。心性は地域や民族や時代によって変わる。近代に始まった教育も一つの心性になっている。近代以前には、徒弟や修業や見習いの習慣はあるが、資格をもった教師が生徒に資格を与える教育概念はなかった。

教育が始まって以来、為政者は教育を使って心性を操作することに熱心だった。フロイドの甥である、アメリカの学者のバーネイスは著書『プロパガンダ』（1928年、未翻訳）で、「民主主義とは、為政者の意図を民衆が自ら進んで行うようにする方法だ」と説いた。心性操作の元祖である。

現代の心性操作には様々なものがあるが、ここで取り上げるのは2006年から2007年に話題となった教育問題の内、教育基本法改定、未履修、いじめ、教育再生会議第一次報告の4つの中の心性操作を取り上げる。

小学校六年生の女兒が同級生を刺殺した事件、証券取引法違反でライブドアの堀江の逮捕、親殺しや子殺しの事件が起きた時、安倍総理は「だから、教育基本法を改正しなくてはいけない」と述べた。教基法改正の目的が心性操作であることが分かる。

高校で公立20%強、私立40%強の生徒が指導要領の必修単位を未履修のままだった。その時点で指導要領は法律ではなかった。ところがマスコミも大学も文科省も教委も、二人の校長は自殺してまで「法律違反は遺憾」と述べた。国が教育内容を規定する方向に、心性操作されていたのだ。

いじめは人間関係そのものだ。だが多くの人は「教育によっていじめが無くせる」という前提でものを言っている。教育心性がしみ通っているからだ。教育再生会議の提言は心性操作に満ちている。いじめへの「毅然たる態度」や、教師や学校の評価、学力向上等、現実にはできそうもないことを提言するのは、心性操作が目的だからだ。

ささき・けん 日本社会臨床学会運営委員、神奈川県高校教育会館教育研究所代表。著書に『怠学の研究』『資格を取る前に読む本』（三一書房）、『教育という謎』『親と教師が少し楽になる本』（北斗出版）などがある。『現代思想』07年4月号や『熊本日日新聞』連載コラム「教育時評」などで、拙文を読んでいただければ幸いである。なお、上記演題と関わって、「教育私企業化」社会臨床雑誌14巻1号（2006.4）、「06秋の合宿学習会・グローバリズムと教育私企業化」の発題（社会臨床雑誌14巻3号（2007.3））がある。

〈シンポジウムⅡ〉教育とグローバリズム

はじめに

今回のシンポジウムⅡは、佐々木賢氏の記念講演「グローバリズムと心性操作」と連動している。グローバリズムという言葉が日本で時代のトレンドのように使われ始めたのは、1996年あたりかららしいが、ここ1年ほどの間に「格差」や「ワーキングプア」といった現実を通して、新たな時代を切り拓くと喧伝された「規制緩和」や「官から民へ」というグローバリズムの戦略が、実際には何をもたらしたかが、多くの人の目にはっきりと見えるようになったと思う。

こうした状況を踏まえて、今回は三人の発題者の方に、それぞれの関心領域とグローバリズムとの関わりを語っていただくことになっている。

小沢牧子氏は、臨床心理家としての体験を踏まえて、心理主義化する社会を鋭く批判されてきたが、今回は政治・経済の問題も射程に入れて、グローバリズムと愛国心教育の関連について思索を深められている。グローバリズムとナショナリズムは表裏一体なのだという説に、どのような新たな視座が加わるか、とても楽しみである。

中島浩壽氏には、今急速に人々の間に浸透する「自己実現」という概念と、グローバリズムの関わりについて話していただく。近代個人主義の自己確立と「自己実現」はどう違うのか、ある人々には抑圧としかならない「自己実現」とはどういうものか……興味は尽きない。

学校選択の自由、バウチャー制度、教員にも成果主義を、事務室業務は外注で……とグローバリズムは教育のシステムに浸透しつつあるが、それだけではない。もっと直接的に現場の児童生徒の日常のあり方に深い影響を与えつつあるのではないか、現場の実践を踏まえつつ、岡崎勝氏に語っていただく。

三人のお話が佐々木賢氏の講演と連動しつつ、どんな展開を見せるか、司会としても楽しみにしている。

(シンポジウムⅡ司会 原田牧雄、林延哉)

発題1 グローバリゼーションと愛国心教育はなぜ親密か

小沢 牧子

経済・政治に詳しいわけでもないのに、とんだ難題を自分で自分に吹っかけてしまったものだと悩んでいる。でも経済・政治をぬきにして教育だけを考えるなどということはそもそもできないことなのだから、ここを考える機会として、ふたつの問題提起をしてみたい。ひとつはタイトルそのものへの仮説、もうひとつは具体的に、学校に使用圧力がかけられている『心のノート』と人権教育読本『にげん』の対比についてである。

一つ目だが、グローバリゼーションと愛国心教育の関係を自分なりに、人が住んでいる家の比喻でとらえると、こんな感じがする。これまでは高い塀をたてて外からかんたんに人が入って来られないようにしていたが、「規制緩和」「政府機能の縮小」「市場原理の徹底」などが進んで、自由に人が出入り出来るように塀を低い垣根に変えた。そして実際に人やモノがさかんに出入りする。すると家と外

の境界があいまいになって、不安になる。家族が家意識を強め結束して家をきちんと守り、安全・防犯対策も充実させてもめごとが起きたら公認された暴力を使う準備をする。つまり家の再編成をする。そして家族にも、家への忠誠を求める。「合法的な暴力を独占するのが国家」は萱野稔人さん（政治哲学）の言葉だが、国家は将来の暴力実行者として、当然子どもたちを視野に入れている。そこで新自由主義と愛国心教育のテキスト『心のノート』も登場する。

そこで二つ目の問題提起になるが、大阪を中心として学校でもう 40 年近く使われてきた『人権教育読本・にんげん』というテキストがある。『心のノート』と同時期に改訂された新シリーズは、『心のノート』と大きさも厚さも学年編成の仕方も偶然同じだが、内容は正反対で、障害者問題をふくめ、反差別・反戦の姿勢を貫いている。ところがこの『にんげん』の評判は、当の大阪では子どもたちをふくめあまりよくないらしい。理由は「暗い」。暗いとは何のことだろう、と考え込む昨今である。そう言えば『心のノート』は、「せなかをぴんとのばしてすすんでいこう。もっとすてきなあなたをみつけよう」と、「明るい」のだ。行く先はきびしい。

おざわ・まきこ 社会臨床学会運営委員、和光大学オープンカレッジ講師、『「心の専門家」はいらない』（洋泉社）、『心理学は子どもの味方か?』（古今社）など。

発題 2 自己実現の教育とグローバル化・心理主義化

中島 浩籌

80 年代なかばの臨時教育審議会答申以降、自己実現の教育という理念が急速に広まってきた。ネオリベラリズム的な思考の浸透もあって、サービスとしての教育、自己実現、自立という言葉が飛び交っている。いったい、この背景には何があるのだろうか。グローバリズムの進展という現象がかかわっていることは間違いない。福祉国家という理念の衰退に経済のグローバル化が関係しているということはよく知られている。その隙間にネオリベラリズムが台頭し、自己実現、自己責任、自立という言葉が広がってきた。ただ「自己実現」という言葉は 60 年代から徐々に浸透しているものでもあり、グローバリズムだけの問題には還元できないだろう。心理主義もまたグローバル化の中で広がっている。しかしこれもまたグローバリズムより歴史は長い。グローバル化と自己実現の教育・心理主義化の関係をどう考えていけばよいのだろうか。

その点をシンポジウムで考えていければと思っている。自己実現、自立という理念は長い間大切なものとして考えられてきた。しかし今日、「ニート」や「不登校」の人たちだけでなく、多くの人々にとってこの言葉は圧力となってきている。今こそ、この言葉の理念を考え直す時なのではないだろうか。この点についても考えていきたい。

なかじま・ひろかず 法政大学・河合塾 COSMO 講師、『逃げ出した教師の学校論』（労働経済社）、『カウンセリング・幻想と現実 上巻 理論と社会』（社会臨床学会編 分担執筆 現代書館）、『心を商品化する社会』（小沢牧子と共著 洋泉社）など。

発題3 グローバリズムマシーンとしての学校教育

岡崎 勝

名古屋市で公立小学校の教員を31年間もやってきたわりには、学校の現場があまり分かっていないなあと、ときどき落ち込むことがある。でも、「分かる」ということは、とても難しいことで、子どもに「二ケタの割り算」を教えているときだって、本当によく分かっている子は少ない。それに、「慣れ」は分かることを忌諱する。自転車に乗れるようになった子どもに、「なぜ、乗れるかというと……」などと説明する必要はないし、そんな説明は拒絶されるだろう。

私が、学校教育がグローバルな世界を形成するときのツールなんだといっても、そりゃあそうでしょう！という人もおおぜいいるはずだ。今回は、学校教育の中で実際に起きている日常的なことから、世界のグローバリズムを支えていく、あるいは共犯関係を構成するような教育の権力を論じてみたい。

もともと教育のグローバリゼーションは、高速情報社会による格差を使った「権力の占有」である。また教育は、差別化された「文化資本」を駆使しながら権力構造を構築する。たとえば、東京ほどではないけれど、お受験（小学校六年生が有名中学、あるいは無名中学に進学）する子どもが名古屋にもたくさんいる。彼らは、なぜ中学校を受験するのか？「将来医者になりたい……」とか、まあ、色々言うが、本当のところはどうなのだろう？あえて、ジモ中へ行かないのはなぜか？

学歴？出世？キャリアを目指して？違うんだなあ。もちろん、そういう子どもや親もいるかもしれない。でも私がみてきた多くの子供達は、「なんとなく」が圧倒的に多い。確固とした理由や目的なんかないのだ。親たちによる意志であり、それは差別化された教育商品を消費することで、不良債権的な「子ども」への投資行為であり、有用性を誇示したり、安全な養育（つまり低リスク）をするためののだ。

教育は、自己エネルギーを投下したり、時間を消費したり、おまけにお金をしっかり使っても、絶対に否定されない。そんな「価値ある行為」とされている。教育の絶対的価値は、グローバリゼーションには、欠くことのできないツールであり、学校教育は有効なグローバルマシーンなのだ。

おかざき・まさる 名古屋市小学校教員、『おそい・はやい』編集人、『ちいさい・おおき
い』編集委員、編著『がっこう百科』（以上、ジャパン・マシニスト）、著書『学校再発見！』
（岩波書店）など。

日本社会臨床学会って何だろうか 入会のお誘いとお協力をお願い

三輪 寿二（日本社会臨床学会運営委員長）

この文章は、この『社会臨床ニュース』を手にした非会員の方へのメッセージです（入会のお誘いになっていけば、と欲をかいています）、会員の皆さんへのレターです。運営委員長というがらみから逃れられないのですが、できれば、学会設立以来、社会臨床学会（社臨）に関わってきたの個人的な思いとして受け取っていただけたらうれしいです。

社臨は、心理職の国家資格化に批判的な者たちが中心となって、資格化を推進しようとする日本臨床心理学会と袂を分かち形で 1993 年に設立されました。袂を分かちときの焦点は臨床心理・心理臨床のもつ問題性でした。その資格・専門性の「心の操作・管理」性はそれらのうちの重要課題だったのです。社臨設立の際、「臨床心理」をめぐる、「臨床」にこだわりつつも、それが持つ「個人還元性」の色彩を排すべく「社会」という言葉を導入し、学会名を「社会臨床」としたのです。この学会名については、「現代社会に生きる人々の悩みや苦しみを直視し、そこを切り口に、「社会における諸問題を臨床する」から「個人臨床に託されがちな問題を社会的文脈のなかで考える」まで、いろいろ受け取り方があるでしょう。

設立から、はや 14 年です。この間、社臨は教育、福祉、医療の分野における諸課題を広範に発掘しながら、私たちが生きる社会と時代の文脈にそって諸課題を解析し、批判的に論じてきました。学校、教育基本法、資格、カウンセリング、支援、心理主義、尊厳死、脳死・臓器移植、介護など諸課題のキーワードは枚挙に暇がありません。こうした経過のなかで、新しいテーマや仲間に出会い、気づき気づかされてきましたが、どちらかといえば、社臨は「個人臨床に託されがちな問題を社会的文脈のなかで考える」という方向性を主としてきたわけです。そして、「社会における諸問題を臨床する」の「臨床」の範疇が一つの課題になっている気がします。臨床が「問題の発掘」くらいまでを射程とするのか、あるいは「解決のための実践」とか「批判対象へのオルタナティブの提言」とかまでを展望するのか、といった課題になるわけですが、少なくとも「取り上げるテーマに対する社臨の具体的な方向性の明示」は必要だ、という意見もあります。これは各人の立場や考え方が分かれるので、なかなか難題です。運営委員会でも時折議論になったりします。ガタガタ言い合うわけです。

今述べてきたさまざまなキーワードやテーマは学会誌『社会臨床雑誌』をめくればすぐに眼の中に飛び込んできます。最新号は 15 巻 1 号で、1 年に 1 巻、1 巻ごとに 3 号、つまり年に 3 冊を発行しています。内容は論文あり、総会や学習会の報告、感想あり、本や演劇や映画から刺激されて考えたことを書く、「映画や本で考える」欄、自分の活動の場の紹介やらそこで起きている問題やらが寄せられる、「この場所から」欄などがあります。堅苦しく感じずに投稿していただけるようになっていきます。創刊号とか 11 巻 1 号とか残部がないと思われるものもありますが、多くのバックナンバーは入手可能です。また、機関紙『社会臨床ニュース』は今回で 63 号、随時に発行していますが、だいたい年に 3～4 回ほどでしょう。

社臨は『社会臨床雑誌』を版下までを自前で作ってから印刷屋さんに回します。いわば手作りですからレイアウトなどは柔軟に変化させられます。そこが楽しくユニークなところなのですが、同時に、さまざまな編集技術も必要で、一部の運営委員にそれらの仕事が偏っています。助っ人がぜひともほ

しいところでは。

社臨の運営委員会はオープンですから、運営委員以外の方々の参加を歓迎しています。運営委員会に限らず、運営委員でなくても会員のみなさんの持ち味を会員のままの立場で発揮して下さいことを大歓迎しています。たとえば、上述の編集協力をするからといって、運営委員である必要はないわけでは。

さて、社臨の現状をいろいろにお伝えしたつもりです。紙幅の関係で十分にはお伝えできなかったのですが、非会員の方には入会を、会員のみなさんには学会運営のいくばくかでもご協力を、と願って、そして、学会が抱える難題と一緒に考えていただけたら、と期待し、筆をおきます。(なお、学会入会の資格・条件は問いません。入会の手続、学会誌の購読などについては、本紙表記の学会事務局にお問い合わせください。あるいは、学会ウェブサイトをご参照ください。URLは、<http://www1.atpages.jp/sharin/> です。入会申込書などを掲載しています。)

社会臨床学会編書籍のご案内

このページと次ページに社会臨床学会が編集しました書籍を出版している出版社3社から広告を頂きました。この中で社会評論社の広告は、最新の出版物の広告を頂きましたので、社会臨床学会編の書籍をここで紹介させていただきます。

社会臨床学会編 『他者への眼ざし 「異文化」と「臨床」』 社会評論社 2400円＋税



社会評論社

Tel 03-3814-3861/Fax.03-3818-2808
〒113-0033 東京都文京区本郷2-3-10お茶の水ビル
<http://www.shahyo.com/> e-mail:info@shahyo.com

治安政策としての「安全・安心まちづくり」

監視と管理の招牌 ●清水雅彦著 2400円＋税

斎藤貴男氏推薦!! 町内会、コンビニ、幼稚園、新聞配達員、愛犬家、ヤクルトレイディ……。

何もかも、誰も彼もが警察になっていく。防犯? テロ対策? 本当にそれだけか。

地域社会が住民を見張り合う相互監視体制が求める国家像は、人々を分断し、疎外してやまない。

本書は気鋭の憲法学者による実態分析であり、真に安心な社会に向けた処方箋である。



第一部 「安全・安心まちづくり」の展開

第一章 戦後治安政策の展開と改憲論

第二章 「安全・安心まちづくり」論の生成と具体化

第三章 「地域安全活動」の実例と問題点

第二部 自治体における「生活安全条例」と治安政策の実例

第四章 東京・千代田区条例の内容と問題点

第五章 東京・世田谷区条例の内容と問題点

第六章 東京都条例及び神奈川県条例の内容と問題点

第七章 東京都の治安政策の内容と問題点

第三部 「安全・安心まちづくり」と「生活安全条例」の批判的検討

第八章 「安全・安心まちづくり」の批判的検討

第九章 「生活安全条例」の批判的検討

第四部 運動する有事体制と少数者の排除

第一〇章 「国民保護法制」と「生活安全条例」

第十一章 「不安社会」と「安全」――オウム真理教事件を手がかりに

終章 「安全・安心まちづくり」を越えて

清水雅彦
Masahiko Shimizu

社会臨床シリーズ【全4巻】各巻2800円

◆臨床心理学・心理病床の自己検証と「資格・専門性とは何か」——「人間・臨床・社会」にかかわる今日的テーマを新たに多様に掘り起こす新シリーズ

第1巻「開かれた病」への模索 ●精神医療の現状を現場から報告しながら、「精神病」を開かれた病へとするための実践と思索の過程を呈示。目次：第1章：精神医療状況は何か故にわからないのか／第2章：閉鎖的精神病床を越える動きと限界／第3章：生活の中の精神科臨床を問う／第4章：治療関係の問題性と展望／第5章：開かれた病への関係を求めて／精神衛生・保健対策年表

第2巻 学校カウンセリングと心理テストを問う
——「生涯学習路線」を問いつつ

●生涯学習社会を出現させようとする国家の意図の中で、学校におけるカウンセリングや心理テストはどのように位置づけられてゆくのか。未来への予測と現状の警告。目次：第1章：学校教育相談と生徒指導の戦後史／第2章：学校カウンセリングの現状と問題／第3章：心理テストと教師の心性／第4章：生涯学習路線とカウンセリング

第3巻 施設と街のはざまで——共に生きる——というこの現在
●「ノーマライゼーション」が叫ばれている今日、20年前の「府中デント闘争」を行い、脱施設と施設改善を訴えた彼らは今何を考えているのだろうか。目次：第1章：府中デント闘争とはなにか／第2章：施設から地域へ／第3章：開かれた施設づくりへの参加／第4章：街の生活から施設改善運動へ／第5章：障害者と共に／第6章：「ノーマライゼーション」のいま

第4巻 人間・臨床・社会 ●人間の心を対象とする「臨床」を様々な角度から捉え返し、その現代的意味、生活における臨床、社会的分脈における臨床を考える。目次：第1章：情報資本主義のなかの臨床の知／第2章：社会臨床論序説／生活における臨床とは何か／第3章：高齢化社会の反教育学／第4章：臨床の歴史性と社会性／第5章：「若者世代」の意識／第6章：「少年」という装置

執筆者：赤松晶子・我妻夕紀子・井上芳保・小沢牧子・斎藤寛・佐々木賢・篠原睦治・武田秀夫・寺田敬志・戸恒香苗・中島浩嗣・根本俊雄・野本三吉・波多江伯夫・林延哉・広瀬隆士・平井秀典・古井英雄・三輪寿二・山下恒男

影書房

〒114-0015 東京都北区中里3-4-5-101 電話：03-5907-6755 Fax: 03-5907-6756
E-mail: kageshobou@md.newweb.ne.jp http://www.kageshobo.co.jp/ 【価格税別】

最新刊

四六判上製 286頁 2500円
崔碩義 韓国歴史紀行
四六判上製 150頁 1800円
広渡常敏 青春無頼
四六判上製 330頁 3800円
宮岸泰治 女優山本安英
戦後文学エッセイ選② 246頁 2200円
長谷川四郎集 全13巻 第8回配本
江藤文夫の仕事② 1966 1971 全4巻 第3回配本 各巻3300円

鎌伸ひとみ
ヒバクシヤ ●ドキュメンタリー 映画の現場から
加藤周一・ノーマライゼーション・徐京植 17000円
教養の再生のために ●危機の時代の想像力
目取真俊 虹の鳥 (話題の長編!) 1800円
好評重版
空と風と星と詩 尹東柱全詩集 尹一柱編 伊吹野訳解説 2300円
感動のロングセラー
青春と抵抗の詩人の全詩集